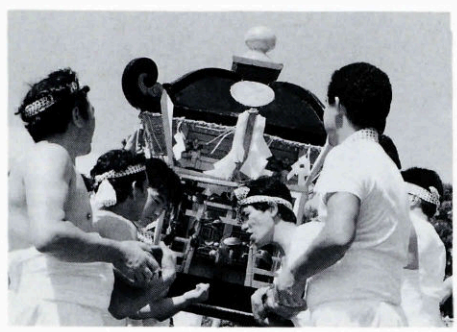


# 自治会の窓



## 中村自治会では…

数年前、中学校の旧校舎が解体されるとき、体育館の床材、サッシ等の払下げを受けて公会堂の改修を行った。集会のたびに不便さを感じていた広間が、何とか使えるようになった。殆んど自治会員の労力奉仕でまかなえ、手出しは現金三十万円。しかし後何十年も耐える建物ではない。その一年後、御神幸を三十一年ぶりに復活することになった。神輿をかつぐ若者のぞうり作りを老人クラブの皆

さんに奉仕していただいた。広間一面に三十数人の方が一日中笑声の中で、大小さまざまな作品を仕上げてください。馬の顔のように長い逸品は公会堂の床の間に保管してある。

集会のための公会堂が、高齢者の憩いの場に役立つことになるとは、申し訳ないことながら改修の意図には入っていないかった。そのときの光景が公会堂に入るたびに思い起される。

若者、壮年が使用することのみが頭におかれた自治会の集会場づくりは根底から考え直さなければと切実に考える。幸か不幸か中村公会堂は老朽化し、早晚改築の必要に迫られている。社会的親孝行ではないが、高齢者の残していただいている今の公会堂を新しいものに変えるとき、それを利用しては広いことを忘れてはならないと思う。

高齢者対策と言えば最優先で、ことが急がれるのが悪いとは言わないが、老人自身のニーズは何か、やがて高齢化



する若者ニーズも問わないで、できることと、してあげたいこととの仕分けもせずに、その場しのぎになり勝ちの対応になることを心配する。町全体の高齢化への対応もさることながら、今単一の自治会でも高齢化社会の構築を真剣に考える時期に直面していると思う。中村自治会には古い文化財遺産がいくつもある。五寺社堂巡り、で老人が動き、働く姿が実現できないものかと思う。若者の定住のみが活性化の要因ではない。

## 杉山・樅ノ木

### 自治会では…

今年の初寄会、二月二日に昨年来浮上していた集会所の改築案が可決した。各戸月掛三千円で三ヶ年計画、平成七年に完成させる。勿論、町からの補助金交付が頼みの綱である。▲現在の集会所を「クラブ」と呼ぶが、元々は樅ノ木青年団の青年宿「クラブ」である。終戦直後の昭和二十二年、三年頃、敗戦の打撃で意気消沈の中から「かくてはならじ」と立ち上ったのは古里に残っていた青年達であった。その頃には地下の寄合い場所はお寺の本堂であったのだがご迷惑と云う事で、自分で青年宿を作ることにした。▲青年団員になるのは国民学校卒業、十四、五才から。その青年団が自分達の宿を作ろうと励んだ。竹切りもした、割木も割った、劇団を作って芝居を興行して木戸銭と祝儀を稼いだ。▲一寸劇団の話。人丸に中沢先生という散髪屋の大將が居て、その先生は東京の或る有名劇団員であった。演劇のプロである。先生の指導で田舎芝居を始めた。下題は

忠臣蔵・弁天小僧Ⅱシガネ私ハ日本左衛門デゴザル…と云うやつ。それから喜劇も入れた。魂消えた古里の人々に帰死回生の活を入れて、一方で儲けようという算段。地下の長老連中は目の色を変えて「お前ら面倒ない事をやるな」と怒ったが、青年団は興行した。▲何しろ敗戦後の意気消沈、娯楽も気楽も何もない時期である、果して大喝采を拍して、到る所でお祝儀が飛んだ。▲かくして荒地を借りて堀立小屋ができた。これが青年団の宿、つまりクラブである。数年を経て現在地に移り、その小屋は木炭集荷場・肥料倉庫として利用されたが、今は農道になっている。▲現在自治会人口百二人、六十五歳以上三十三人、三十二歳（因に十八歳以下、十二人、十一歳）である。さて熱血に燃えた青年団員は既に悉く還暦を越えた。強者どもの夢の跡、もう一度やってみるか。

第三代クラブが早く見たいものである。

M記

